

◆西大寺境内西南隅の調査—第294次

西大寺興正殿の新築工事にともなう事前調査である。興正殿は鎌倉時代の西大寺復興を推進した興正菩薩叡尊上人の記念堂で、現境内の西南隅に位置する(図46)。その敷地は、文亀二年(1502)の「西大寺寺中曼陀羅」にみえる「三銘松」、すなわち灌頂堂と南大門の中間に植えられた松林あたりに相当する。調査トレンチは東西12m×南北15m(180m^2)で、遺構検出面は上層が海拔73.40m前後、下層が海拔73.10m前後である(図47)。基本層序は、上から盛土、近代の耕土、中近世遺物包含層、中世耕土層、遺構面となる。

1. 檢出遺構

SE850 発掘区中央西寄りの円形井戸。二段掘りの形状に抜き取られている。抜取り穴は上面の直径約3m、深さ約70cmで半分の径となり、さらに一段深く掘り下げている。底までの深さは、およそ115cmを測る。また、上層面を10cmほど掘り下げたところ、抜取穴の周辺から

砂粒化した凝灰岩と花崗岩が環状に並んだ状態でみつかった。井戸館の柱礎石の可能性がある。

SE851 西壁際の中央でみつかった円形石組井戸。井戸の直径約80cm、掘形の直径約170cmで、井戸底は10~15cm×3cmの杉板材を縦に組み、その上に石を積み上げている。石組の残高は約1m。埋土からは近代の遺物が集中して出土した。西大寺境内には数ヶ所に井戸が現存するが、それらもSB851と同種の石組円形井戸であり、その上部を方形の井戸館で覆っている。

SD852 西壁よりの南北斜行溝（南で西に約3度振れる）。幅約25cm、深さ6~15cmで、北から南に流れる。

SD853 北壁に流れ込む南北小溝。耕作溝か。

SD854 東壁よりの南北斜行溝（南で東に約5度振れる）。幅約30cm、深さ15~45cm。溝の両壁はほぼ直にたちあがり、黒褐色の埋土に遺物は含まれず、全体を叩き締めている。溝よりも、柵状構造物の基礎のような感があり、SD856・857に切られているので時期的にも古

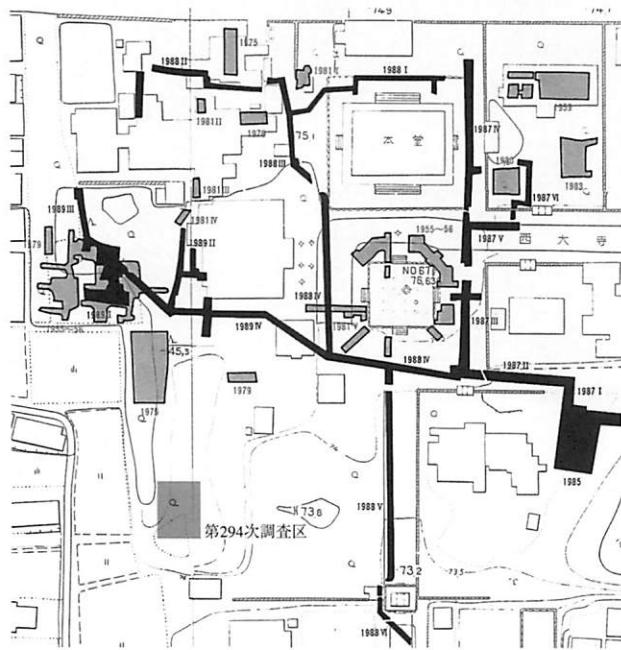


図46 発掘位置図 1:2000

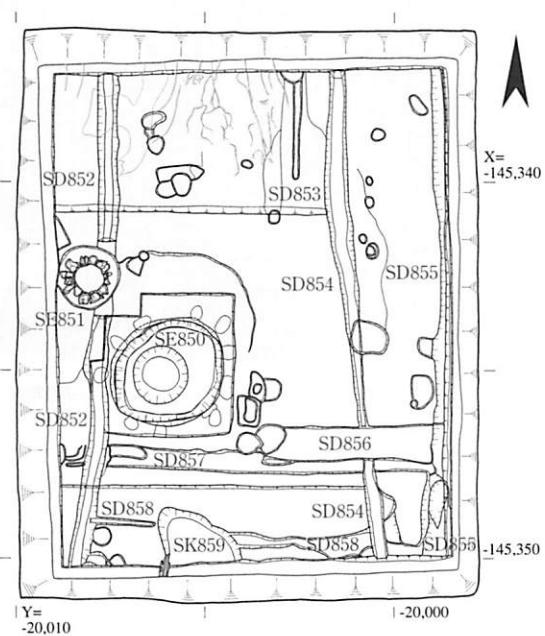


図47 遺構平面図 1:200

図48 SE850出土木製品・金属製品 1:4 (右端挿図は『七十一番職人歌合』二十一番草履作『群書類從』巻503より)

く、SE850と共存していた可能性がある。

SD855 東壁際の南北溝。いくぶん西に振れている。

SD856 SE850の東南隅近くから東へ流れる東西溝。

SD857 SD856に南接する東西溝。重複関係からみて、SD856よりも新しく、溝底まで掘り下げたところ、SD854の一部が検出された。幅20~30cm、深さ約8cm。

SD858 南壁寄りの東西斜行溝(東で南へ5度振れる)。

SD852・855とほぼ直交関係にあり、中近世耕土層(灰黒粘土)にともなう施設の可能性がある。

SK859 南壁沿いの土坑。近代の瓦が大量に出土した。

以上のほか、トレンチ南北両側の下層遺構検出面では、しがらみあう松の樹根痕跡が認められ(実測したのは北側のみ)、SE850の埋土からは御用松の松ぼっくりも出土しており、中世に松林が存在したことを裏付けている。

2. 出土遺物

土器類 SE850の埋土から、完形に近い瓦器と羽釜・鍋の破片が出土した。いずれも1350年以降の土器である。

瓦塙類 おびただしい量の瓦が出土した(表7参照)。とりわけ注目されるのは、SE850の埋土から出土した中世の軒瓦で、叢尊による伽藍復興期(1280年頃)のものがめだつ。
(浅川滋男)

木製品・金属製品 包含層である青灰土中より漆塗り容器蓋、SE850底部より栓(図48-1)、横櫛(3)、箸(5)、蓋板、曲物、草履状木製品が、また抜取より鉄鎌(2)が出土した。4は蓋板。円盤に2ヶ所の小孔を設け、一方には木釘が残る。直線をなす側面にはそれぞれ一対の小孔がある。板を合わせるためのものであろう。6は草履状木製品。左右対称の2枚の板材からなり、これを芯にして藁などを編み込み緒をつけたものである。左右の切取部の位置を合わせると、長さ24cm、幅8cmに復原できる。厚さは1.5~3.5mm。先端・後端ともに方形に作り、切取以後の

表7 第294次調査出土瓦塙類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			
型式	種	点数	型式	種	点数	
西大寺 82	A	1	西大寺 303	A	8	
86	I	7	313	A	1	
184	A	1	317	A	1	
中世		2	333	A	1	
小型菊丸		24	350	A	1	
鎌倉巴		4	392	C	3	
中世巴		2	392	I	1	
近世巴		1	394	A	1	
軒棧小型巴		1	中世		2	
			近世		7	
			型式不明		2	
軒丸瓦計			43	軒平瓦計		
丸瓦		平瓦		道具瓦他		
重量	155.0kg	497.5kg	留蓋	1	雁振瓦	1
点数	1,079	3,455	面戸	1	熨斗瓦	1
			隅木蓋	2	鳥衾(巴)	2
			隅切平	1		

側縁を外反ぎみにする。図の左は両面割裂、右は片面ケズリ、片面割裂。ヒノキ材。広島県福山市草戸千軒町遺跡では、本例と類似する形態のものが、14世紀中頃~後半の遺構に伴っている(下津間康夫「履物類の様相一下駄・草履状木製品」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V』1996)。なお第282-6次調査では、端部の丸い形式で長さ15.4cmの小型品が出土している(『年報1998-III』: p.66-67)。

(次山 淳)

3.まとめ

西大寺が造営された奈良時代称徳朝において、本調査地には建物類が一切存在しなかった。おそらく叢尊による伽藍復興の前後に井戸SE850が掘削され、それは松林とも共存していたが、14世紀後半以降、井戸枠が抜かれて廃絶し、ここは一時期田畠と化した。しばらくして境内地に復旧したものの、近代に再度田畠と化し、それが再び境内地に復旧して今日に至る。それにしても、叢尊を記念する施設の事前調査において、叢尊ゆかりの遺物や遺構が数多く出土したことは、偶然とはいえ、まことに幸運であったというほかない。

(浅川)